

活動報告書

報告者氏名：今村 公一 所属：埼玉県立大宮北特別支援学校小学部 記録日：平成25年2月25日

【対象児（群）の情報】

・学年

小学部1年生男児（A児）

・障害名

発達障害、精神運動発達遅滞、先天性右眼瞼下垂

・障害と困難の内容

身辺処理は、多くの介助が必要。CDから流れる音楽を聴くことや手遊びは好きであるが、全般的に興味関心の幅が狭く、周囲からの働きかけにも応じることが少ない。また、自らの意思や要求を周囲に伝えることもほとんどない。身体が小さく（4月時点で体重10kg）、体力がないため疲れやすい。

【活動目的】

・当初のねらい

あらゆる事象に対して興味関心の幅が狭く、周囲からの働きかけにも応じることが少なかったり、応じられたとしても継続的に受けるということが少なかった。また、自らの要求を周囲に発信することがほとんどなく、生活全般が受身的に進んでいるように感じていた。そこで、iPadを使用し興味関心の幅をひろげたり、自分で操作する楽しさを味わうことで、生活を自ら生み出す喜びに少しでも繋げていけたらと考えた。

・実施期間

朝の自立活動の時間に実施：一週間に2～3回（1回の使用に20分程度）

実施期間は2012.5月～2012.12月

・実施者

今村 公一（小学部）

・実施者と対象児の関係

A児の担当教員

【活動内容と対象児（群）の変化】


・対象児（群）の事前の状況

身辺処理（衣服の着脱や食事、排泄等）全般に介助が必要で、さまざまな活動において受身で行われていた。自ら要求を周囲に発信する手段や方法もなく、また喜怒哀楽等の表情にも乏しく、A児の要求や思いを受け止めることができなかった。

・活動の具体的内容

- ① 数種類のアプリを起動させ、児童と一緒に遊ぶ活動《興味関心の幅をひろげる①、②》
- ② カメラ機能（写真やビデオ）を使用し、写真やビデオと一緒に撮影し鑑賞する活動《楽しさを共感し、相手に伝える①、②》

・対象児（群）の事後の変化

期 間	ipad を使用した活動	児童Aの様子・変容
5月 ～ 6月	《興味関心の幅をひろげる①》 ・軽快な音楽、視覚的にも鮮やかで動きのあるアプリを使用。 ・見て、聴いて、触れる体験をする。	・タブレットへの関心が全くなかったが、アプリを起動し音を流し始めると、自ら駆け寄り画面を覗き込む。 ・画面の動きに注目し、時折画面に触れることもあった
7月	《興味関心の幅をひろげる②》 ・午前の遊びの時間に10分程度使用。 ・より興味がみられる2つのアプリに限定し使用。 	・タブレットを机上に準備し始めると、自ら駆け寄り、タブレットに触れ始める。 ・アプリが終了したり、突然画面が変化すると、隣にいる教員に訴えるように視線をむけることが出始める。
9月 ～ 10月	《楽しさを共感し、相手に伝える①》 ・新しいアプリを追加。遊びたいアプリを選択、決定したり、相手に伝える経験を積めるようにする。 ・カメラ機能を使用。静止または動画を撮って、一緒に見る活動を取り入れる。	・画面上に2～3つのアプリを提示した。自分が遊びたいアプリが機能しないと、教員に視線を向けたり、手に触れるて訴えることが増えてきた。 ・カメラ機能（特に動画）に興味があり、撮った動画を何度も再生しては歓声をあげて楽しんで見ている。アプリ使用中にも、カメラ機能を「使いたい」と伝えることもあった。
11月 ～ 12月	《楽しさを共感し、相手に伝える②》 *活動内容は同様 	・カメラ機能（動画）を使用時、「画面→被写体」を確認するように被写体側に走りこんだり、「画面→教員→被写体」へと視線を移動させたりする行動が頻繁に見られるようになってきた。特に、教員へ視線を向けるときには、「何？」「楽しいね」という共感を求めることが多く、笑顔や歓声を伴うことが増えてきた。

【報告者の気づきとその他のエピソード】

・主観的気づき

楽しい手遊び歌やアプリの軽快な音楽を多用したことで、活動への興味関心がひろげることができた。楽し

い活動を積み重ねることで、「もっと」という思いが膨らみ、その思いを達成するために誰かに伝えようという思いにも繋がっていったと考えられる。はじめは楽しい活動が（時間の都合で）終了されても、泣いて終了したことを惜しむだけだった児童Aが、教員と視線を合わせたり顔を覗き込んだり、教員の身体に触れたりして、「もっと」という思いを伝えることが増えてきた。その後、児童Aの思いを受け止めながら、教員の身体をたたく、手を引く等の手段を同時に伝えていった。現在は、教員の手を引く、身体に触れて遊びの要求を伝えることがますます増えてきた。

・その他エピソード（画像などを含めて）

iPad の使用と同時並行で、身体の機能を高める自立活動や日常生活の指導での場面で、さまざまな取組を行ってきた。それらの活動全般で見られることであるが、『自ら行動をする』ことが増えてきたように思う。例えば、衣服の着脱では腕を引っ張られて袖を通して着ていたが、自ら袖を通すことができるようになったり、靴を脱ぐ・履くということも、自分から足を動かし脱いだり、靴の中に足を入れようとしたりという大きな変化が見られるようになった。また食事においては、偏食とともに『食べる』行動が苦手で、一切口にしないこともあったが、「これは食べたくない」「今はいらない」というような思いを表情や食器を押す等の仕草で伝えるようになったり、自ら道具（スプーンやフォーク）で食材をすくってみる行動が増え始めた。

iPad の使用が、『興味関心の幅をひろげる』ことや『相手に自分の思いを伝える』ことの喜びを知るきっかけになっていった同時に、『自ら行動をする』経験にも繋がっていったと考える。今後も iPad を生活の中で使用しながら操作性を高め、より生活に身近な物に近づけることで、A児の生活も豊かになっていくのではないかと考える。